



World End
Chronicle
Before you betray the world
Story by Shimono Osukai
Art by Isegawa Yasutaka

霜野おつかい
イラスト イセ川ヤスタカ

君が裏切る前に

特別試読版 ep4

GA文庫

相反する少年少女が
世界を再構築する
ヒロイックファンタジー!

世界を救うため、
彼女と手を取り合い戦え

私が世界を
滅ぼす前に、
どうか私を
救って
ちょうだい

四章

並行未来

World End Chronicle
Before you betray the world

「だからー！ さっさきから何度もそう言ってるじゃないー！」

「……う、ん？」

耳に突き刺さる悲痛な声で、クロウの意識はゆるゆると覚醒する。

重い頭を無理やりに持ち上げて、あたりをうかがってみれば――。

「ここは……」

民家が丸々一軒入りそうなほどの、広い応接間だ。

調度品はどれも庶民が見てもわかるほどの一級品で、天井てんじょうは真っ白な大理石。

クロウが座らされているこのソファセットだって、革張りの上等品だ。

だがしかし、その居心地の良さを堪能することは叶わない。

なぜか全身を荒縄でぐるぐる巻きに縛り上げられていたからだ。

おまけにすぐ目の前には、すさまじい威圧感を放つ人物が座っていた。

「おっ、今度はこつちが気付いたか」

ローテーブルを挟んだ向こう。革張りの安楽椅子あんらくいすに収

まるのは、小柄な人物。

その顔を確認してクロウの喉がひゅつと鳴った。

「と、トリス様……」

「かはは、ぐっすり眠れたようだな。クロウ」

王室顧問魔術師、トリス。

ニヒルな笑みを浮かべる彼女の手には、無骨な銀の拳銃が握られていた。小さな手には余るはずのそれを器用にくるくると回す。

「いやあ、驚いたのなんのって。屋敷に戻ってきてみたら、うちのお姫様とおまえがドンパチやってんだもん。だから催眠ガスで眠らせて、縛ってここに連行してみたんだけど……」

チャキツと軽やかに安全装置を外し、銃口を真つすぐクロウに向ける。

「異論があるなら聞かぬ。ただし、体のどっかに風穴が空いちやうかもしれないけど？」

「あはは……異議なしです」

「私は文句大ありなんだけど!？」

顔を引きつらせるクロウの隣から怒声が上がる。

そこにはまなじりを限界までつり上げたラインが座っていた。クロウと同じで荒縄のぐるぐる巻きである。寝間着に縄が食い込んで、かなり煽情的なありさまだ。

「なんで私まで縛られているわけ!? この男はともかくとして、どう考えてもおかしいじゃない!？」

「えー。だってそうしないと絶対おまえらまた喧嘩けんかを始めるだろ？」

「だーかーらー！ さっきのはただの喧嘩じゃないって何度も言ってるでしょー！」

リインはじろりとクロウをにらむ。

「私はこの国が滅ぶ、破滅の未来から戻ってきたの！ その原因を作ったのが、ほかでもないこの男！ その未来を変えるために、そいつを殺そうとしてたんだってば！」

「……うちのお姫様はこう言っているんだけどさ、クロウ」

トリスは目をすがめ、クロウを見やる。

「おまえさんも、なにか言いたいことがあるんじゃないのか？ さつきこいつと戦ってたときは、いろいろと気になることを叫んでいたようだしさ」

「……黙秘する、って言ったらどうなりますかね」

「別にかまわねえけど？ きつつい自白剤を盛るって選択もあるしな」

「しゃべります。だからその、いかにも怪しい試験管をしまってください。早く」

「ちえー、自信作だったのになー」

ぽこぽこ泡の立つ蛍光グリーンの謎なぞの液体を、トリスはしびしび懐ふところにしまう。

冗談めかしてはいるものの九割がた本気だろう。

クロウはため息をこぼしつつ、ぽつぽつと語った。

自分もまた十年後の未来からこの時代へと戻ってきたこと。

未来ではリインに騙だまされ、彼女が国を滅ぼす手助けを
してしまったこと。

その破滅の未来を食い止めるために……リインを殺し
に来たこと。

すべてを打ち明けた後、トリスはあごを撫なでながら唸うな
る。

「まさか師匠が未来のあたしとは。それなら影導魔術を
使えることに納得はいくんだけど……おまえさんたちの
主張をまとめるとだ。ふたりとも十年後の未来からやつ

てきて……未来が滅ぶその原因が、相手の方だつて言いたいわけだな？」

「その通りなんですが……意味わかんないですよね」
クロウはため息をこぼすしかない。

自分は……たしかにリインがこの国を、世界を滅ぼす様を見た。

それなのに当のリインは、それはクロウの方だと言つて譲らないのだ。

「たしかにわかりやすく矛盾してるよな。どっちかが嘘うそをついている、ってことなら単純なんだけどさ」

「ちよっ、ちよつと待ってよトリス！ この男はともかくとして私を疑うわけ!? 十年以上も一緒に暮らしてる

くせにー！」

「いや、信用したいのはやまやまだぜ？　でもさあ……」

身を乗り出して抗議するリインに、トリスは肩をすくめてみせる。

「だったらおまえ、なんであたしにそんな大事な話を黙っていたんだ。長い付き合いなら真っ先に相談するはずだろ」

「うっ……だ、だっ……」

リインは勢いを失くして、しゅんとうなだれてしまう。「未来から戻ってきたただなんて、めちやくちやな話だっ
て自分でも思うし……ちゃんと信じてもらえるか不安だ

「つたんだもの」

「……つたく。バカだなあ、おまえは」

「わわっ」

トリスはテーブルの向こうから身を乗り出して、リンの頭をわししゃわししゃとかき混ぜる。外見は年の近い姉妹しまいといったところだが、こうしてみると親子のような、祖母と孫のような……そんな不思議な空気だった。

上目遣いでうかがうラインに、トリスは柔らかな苦笑を向ける。

「あたしは、おまえを赤ん坊のころから面倒見ている親代わりなんだぜ？ もっと信用してくれよな。ちゃーんと信じてやるともさ」

「トリス……」

リインは瞳ひとみをうるませながら、クロウのことをあごで示す。

「それじゃあ、さっそくこの男を始末しちゃいませよ。簀す巻まきにしてサメの多い海域に放り込むもよし、足からちよつとずつつ切り落としていくもよし、車裂くるまぢきにするもよし！」

「うん。それとこれとは話が別だな」

「なんでよ!? 信じてくれるって言ったのに！」

「つーか俺おれを殺す方法が全部妙にグロいのはなんでなんだ……ギヤングか海賊かなにかか、おまえは」

「お姫様よ！ そんなの積年の恨みが詰まってるからに

決まってるでしょ！」

堂々と言ったのけるリインだった。

恨みならクロウの方も相当あるのだが……泥沼になるのがわかりきっていたため、反論はぐつとのみ込んでおく。

そんなふうにならみ合うふたりをしり目に、トリスはひょうひょう飄々と肩をすくめてみせる。

「真偽をたしかめずに動くのはあたしの主義に反するんでね。ここはひとつつたしかめてみようじゃないか。どっちが嘘をついているのかを」

「たしかめるって……どうやって？」

「なあに、ごくごく平和的な手法さ」

そう言っ指を鳴らせば、どこからともなく魔道人形のメイドが現れた。

メイドが運んでくるのは台車に乗った謎の機械だ。ひどくごちやごちやとした外観からは、何に使用するものなのか見当もつかない。

「なんですかこれ……拷問器具ごうもんかなんかです？」

「平和的って言っただろ。ちよつと前に、遊びで作ったものなんだけどさ。魔術を使っない機械だから、インにも効くし……つと」

トリスがそれをかちやかちやといじれば、機械のランプに光が宿って――。

「それじゃ、見せてもらおうかな……真実ってやつを

やー！」

「っ!?」

まばゆい光が弾けたその瞬間。

クロウの頭の中に、見知らぬ映像が再生される。

それはクロウもよく知る十年後の光景だ。

赤く染まった空に浮かぶ、魔界の扉。

終わりにかけた世界のただ中……小高い丘にて、血まみれの女が倒れていた。

簡素な鎧よろいをまとった彼女は、ぼうぜん呆然と目の前の人物を見

上げるばかり。

その視線の先に立っていたのは――。

(俺……!?)

十年後のクロウ、その人だった。

漆黒しゅくくのローブをまとうその姿は、一級の魔術師と呼ぶべき風格をたたえている。

だがその目は暗くよどんでいて……彼はふっと自嘲気じちようき味に笑う。

『俺が世界を滅ぼす前に……どうか俺を殺してくれ』
そうやって彼は金の指輪を差し出した。

そこで、映像は途切れる。

「っ……なにこれ!?!」

「人の記憶を覗く装置さ。ラインの記憶をクロウに、ク

ロウの記憶をリインに見せた」

トリスはふたりを交互に指し示し、いたずらっぽく笑う。

しかしそのロウはすこしばかり引きつって、彼女にしてはどこか苦々しいものだった。

「そんで、あたしは両方の記憶を覗のぞかせてもらったんだが……くくく、お遊びで作ったにしてはうまくいったなあ。我ながら才能が恐ろしいぜ」

「い、いやいや！ 待ってください！ おかしいですつて！」

ひとり納得するトリスに、クロウはツツコミを入れる。いくら頭をひねっても、絞り出しても、あんな光景に

覚えはない。

「立ち位置がまるつきり逆なんですっつてば！ 俺がこいつを止めようとして、ボコボコにされた側なんですよー！」

「そっ、そうよそうよー！ そもそも私が、あんな変なピエロみたいなのやつとつるむわけないじゃない！」

「あ……言われてみれば、おまえの記憶の中にもいたな、あいつ」

十年後の未来で、クロウに不意打ちを浴びせかけた敵。名前もわからない魔族の道化師。

そのやけに目立つ姿が、先ほど見せられた中にも確認できた。

おまけに、ラインに聞けばその年月日もぴたりと一致

していたのだ。

「つまり俺たちの主張する未来は、筋書はそっくりそのまま同じだけど……復讐者ふくしゅうとその仇かたき。その配役だけが入れ替わってる、ってことか？」

「配役って、お芝居じゃあるまいし……あっ！」

そこでリインはハツとしたように、クロウに食って掛かるのだ。

「あなた、魔術でなにか細工したんでしょ！ それで偽の記憶を見せたのよ！ 違う!？」

「冗談よせよな、リイン。そんな小細工、あたしが見破れないとでも思うのかい」

「うぐっ！ で、でもそうじゃなきや……こんなの説明

がつかないでしょ!?!」

狼狽ろうばいするリイン。クロウも言葉にはしないものの、頭の中はごちゃごちゃだった。

（たしかに、リインの記憶にいた男……あれは間違いなく俺だった）

得体のしれない悪寒おかんが背筋を走る。

ふたりは重く押し黙るが、トリスはあっさりと言断するのだ。

「大混乱のところ悪いんだけど、説明ならたぶんできるぞ」

「へ？」

「ヒントはおまえさんたちの指にあるもの。さっき出し

てただろ。ちよつと見せてみな」

指を鳴らせば、ふたりを縛っていた縄がはらりとほどける。

促されるままにおずおずと右手に収まる指輪を見せてみれば……トリスの表情がかすかに曇った。

「やっぱり本物の聖遺物、道標輪廻どうひょうりんねだ。百年ほど前に行方不明ゆくえになつた代物しろものなんだけど……いつたいどこにあってどれくらい知ってる？」

「……魔神が使っていた魔道具、つてことくらいしか」
三百年前。

魔界からやってきた魔神は、絶大な力を揮ふるつてこの世

界を脅かした。

その力の源となつたのが六つの魔道具、聖遺物と呼ばれる代物だ。

「そう。そして聖遺物は、それぞれ異なる能力を有している。そのうちでも、この指輪はいつとう特殊でね」
指輪をふたりに投げ返し、唇を歪めて彼女は嗤う。

「この指輪は、持ち主にやり直すチャンスを与えると
言われている」

「やり直すチャンス……ですか？」

「そうとも。正しくは、世界を選び直す機会とでも言う
のかな」

トリスはどこからともなく大きな羊皮紙ようひしとペンを取り

出し、それをテーブルに広げる。

「世界つてのはな、実はひとつじゃないんだよ。人の選
択の数だけ分岐を繰り返す。誰かだれが誰かを助けたり、殺
したり、はたまた出会ったり出会わなかったり。こんな
ふうにな」

最初に引いたのは、一本の直線。

しかしその先端はやがて二本に分かれ、そこからさら
にどんどん枝が増えていく。

最後にできあがったのは大木のような図だ。

「こうやって世界は無数にできあがる。ほれ、同じ親か
ら生まれた兄弟でも、まったく同じ性格に育つとは限ら
ねーだろ。そんな感じ。こういう分岐を並行世界って言

うんだが……たとえば、こっちの世界で指輪の持ち主が
どうしようもないような苦難におちい陥ったとする」

適当な枝の一本にバツをつけ、トリスは続ける。

「そんなときに、指輪は持ち主を過去へと送るのさ。そ
の苦難の歴史に分岐する前の時代にな」

そう言って指し示すのは大樹の根元。

「おまえさんたちの言う十年後ってのも、それぞれ枝分
かれした未来のどれかなんだろう。違う世界だが大本は
同じ。だからこうやって、指輪を使って大本の時代で再
会した」

「つまり私たちって……」

「異なる未来から戻ってきた、ってことなのか……？」

クロウはリインが裏切り者になった未来から。リインはクロウが裏切り者になった未来から。それぞれ戻ってきた……のだという。

ふたり同時に顔を見合わせて、ごくりと喉を鳴らす。にわかには信じがたい話だ。だが、筋は通っているよ。うな気がする。

「そもそもその指輪は世界にひとつしか存在しないはずなんだ。それなのに、この場にあるのはふたつ。おまえさんたちが別々の世界からやってきたなによりの証拠だろ」

トリスは神妙な面持ちであごを撫でる。

「しかし聖遺物が集まって世界が減ぶとは、なんとも

スケールの大きな話だねえ。でも今見た限りじゃそれもマジっぽいし……うん？」

しかしふとなにかに気付いたように、小さな眉まゆをひそめてみせた。

「つーか。そんな大変なときに、あたしはなにをやっているんだ？」

「へ？」

「おまえさんたちの記憶じゃ、あたしの姿はなかったろ？ どつちの世界でもリインが嚙んでるんだ。あたしが大人しく黙っているとは思え……うん？」

黙り込んだふたりに、トリスは小首をかしげる。

しかし、すぐにはっと気付いたようで半笑いをうかべ

るのだ。

「お、おいおい、なんだよその空気。それはさすがに冗談きついつて」

「……残念ですが、その」

「十年後に、トリスはいないわよ」

□ごもるクローウのかわりに、リインがきっぱりと答え
た。

トリスはしばし押し黙ってから重い口を開く。

「ひよっとして、その……トランヴァース王国が滅亡し
たときかい？」

「いいえ、その三年後。深緑しんりよくの谷消失事件のときよ」

「はい!？」

広々とした室内に悲鳴のような声が響き渡った。

「た、谷が消えたただって……？ この世で最も堅牢けんろうな魔術要塞都市ようさいが!？」

「……そうですよ。聖遺物が奪われたあげく、一晩のうちには跡形もなく更地になりました」

クロウはため息まじりにうなずいた。

深緑の谷。

エルフ族が治める、永世中立都市の名である。千年も前から姿を変えずに存在しており、魔神が現れた三百年前ですらほとんど被害を受けなかったということを知られている。

だがしかしそんな難攻不落の都市ですら、十年後の未

来においては消失していた。

生き残りがほとんどいなかっただたため、いつたいなにがあつたかも不明のまま。

ただ、エルフのひとりとリインが共謀し、聖遺物を奪つたのだという噂が、まことしやかに囁かれていた。

「トリス様は、トランヴァース王国滅亡事件のときはころうじて難を逃れました。それで、この屋敷で国の後始末なんかをしながら……俺に影導魔術を叩きこんでくれたんです」

だがしかし、それから三年ほどたったある日。

谷にひとりで出かけて行って事件に巻き込まれ……それつきり屋敷に帰ってこなかった。

「……同じだわ」

そこでリインが呆然ぼうぜんとつぶやく。

「状況も時期も……私の時とまったく一緒よ」

「……まさかとは思うけど、ほかの事件もそうなのか？」

トランヴアース王国滅亡事件。

深緑の谷消失事件。

とうりゆう東龍共和国内乱事件。

その他、ほかこの国が滅んでから各地で起こったあらゆる重大事件。

互いの知るそれらの時期や内容は、細部に至るまで一致していた。

そして……そのほとんどに、聖遺物とお互いの名前が

絡からんでいることも同じだった。

おかげでトリスはますます顔を歪ゆがめてみせるのだ。

「どれもこれもひどい事件のようだね。相当死んだだろ
う」

「そうですね……どこもかしこも世界の終わりっ
て感じ
でしたよ」

今でもまぶたを閉ざせば、あの時代の光景がまざまざ
と蘇よみがえる。

あちこちで国や街が滅ぼされ、戦火を免れた場所は難
民であふれかえっていた。

大通りには物乞ものごいが列挙し、親を亡なくした子供たちが
裏路地で暮らす光景など日常茶飯事。犯罪も急激に増加

し、日々飛び交う新聞に書かれていたのは悪いニュースばかり。

どこに行っても、色濃い閉塞感へいそくが根を張っていた。

「でも、おかしいんです。別の未来じゃ、俺がその事態を引き起こしたって言われても……そんなことをする理由なんて、まるで心当たりがありません」

クロウはこの国が好きだった。

そこそこの愛国心は持ち合わせていたし、少なくともこの国にはラインがいたのだ。

あのころのクロウはたしかに彼女を愛していて、彼女と過ごす日々満足していた。

そのすべてを、自らの手で壊すはずがない。

「っ……私だっつてそうよ！」

リインもまた追い詰められたように声を荒らげる。

「私がこの国を滅ぼすわけないじゃない！ 誰かを傷つけるくらいなら……私がかわりにいくらでも傷を負う！

それが、英雄イオンの血を引く私のやり方よ！」

「まあ、おまえはそういうやつだよなあ」

トリスはあごを撫で、ちいさくうなずく。

（滅ぼすわけがないって……本当にそうなのか？）

目の前にいるリインは、クロウのいた世界とは別のリインだという。

だがしかし、完全な別人というわけでもない。

そもそも彼女は王族でありながら魔神の呪い^{のろ}に苦しめ

られて、不当な扱いを受けている。家族から見放され、一般市民からも恐れられる境遇ともなれば……ほんのすこしくらいは世界を恨むのではないだろうか。

それが時を経て大きくなっただのだから——動機は十分あることになる。

（やっぱり、こいつを殺さない未来は……!?）
そうあらためて決意しかけた、そのときだ。

——否^{いな}。汝^{なんじ}の殺意は届くに能^{あた}わず。

「——いっ——だだだだだだだ!?」

頭の中で声が響いたかと思えば、強烈な頭痛が襲う。

ラインに刃を向けたときに起きたのと、そっくり同じ現象だ。

あのとときと違うのは……ふたつの悲鳴が重なったことだろう。

「…………へ？」

「ううう……い、今のなに……？」

見れば隣ではラインがクロウと同じように頭を抱え、涙目で呻うめいていた。

「なんだか、急に頭が痛くなっただけ……」

「えっ、おまえも……？」

「ふうん。ちよつと聞きたいんだけどさ」

トリスは目をすがめてふたりの顔を見比べる。

「おまえさんたちが道標輪廻に願ったのって、どういう願いだっただんだ？」

「え、そりゃもちろん……」

世界に降りかかった災厄を、すべてなかつたことに。クロウとリインの口にした願いは一字一句おなじものだった。

それを聞いてトリスはますます眉根まゆねにしわを寄せせる。

「なるほどねえ……だがそうなること、ますます事態は厄介なことになるなあ」

「納得してないで教えなさいよ。さっきの頭痛となにか関係があるわけ？」

「もちろん。関係大ありさ」

トリスは肩をすくめて、ふたりの握る指輪を指し示す。
「その指輪は持ち主を過去に送るだけじゃない。主が望^{あるじ}
む未来へ導いてくれるのさ。だから道標輪廻。持ち主が
間違った選択をしようとしたとき、警告を与えてくるん
だよ」

「……は？」

ふたりそろってぽかんと口を開いて固まってしまう。
選択を誤る……？

そこで真っ先に気付いたのはクロウの方だった。
先ほどと、ラインの寝室に忍び込んだとき。

ひどい頭痛が襲ったときの共通点といえば――。

「俺がラインを殺そうとしたこと……それが、間違いだ

っていうんですか？」

「なっ……！　あなた今そんなこと考えたの!？」

「非難するのは勝手だが……おまえもさっき苦しんでただろ。俺と同じじゃないのかよ」

「ぐっ……た、たしかに、今なら油断してるし、さっくりに殺せそうとは思ったけど……」

「つまりお互いの殺意を、指輪は邪魔したいわけだ」

トリスはしばし口元に手を当てて考え込んで。

「平和な未来に……互いの存在が必要不可欠、ってことか？」

「はああああ!?!　そっ、そんなわけないでしょー！　こいつは私の敵！　それ以下でも以上でもないわ!！」

がたんつとソファを立って吠^ほえるリインだった。

「ちよつと待ってなさい！ こんな指輪、今すぐ海にでも投げ捨ててっ……なんで外れないわけ!？」

「あー、ダメダメ。一度主^{あるじ}と認めたら、主の望みが叶^{かな}うまで取れないぞー」

「とんだ疫病神じゃないですか……」

ためしにクロウも指輪を外そうとしてみるが、まるで皮膚の一部になったかのようにびくともしない。これは指を落とす以外に取る方法はなさそうだ。

(どうする……これじゃ計画が台無しだ)

しばしクロウは思考をめぐらせる。

未来を変えるにはリインを殺すしかない。

そう考えていたのに、おもわぬ邪魔が入った形になる。リインも指輪をじっと見つめて黙り込んでいるし……そこでクロウは、ふとした疑問を覚えるのだ。ゆっくりと顔を上げ、目の前のトリスに尋ねる。

「この指輪を捨てられないってことは、俺たちの望みはまだ叶っていない。つまり、まだ……この世界が災厄に襲われる可能性があるってことですよね？」

「ま、順当に考えればそうなるだろうね」

「……だつたら、考えられるパターンはふたつです」
クロウはため息をこぼし、リインをちらりと見やつてから。

「ひとつ。俺とこいつのどっちかが、聖遺物を盗み出し

てこの国を滅ぼすパターン」

「つつ！ バカ言わないで！ 私が必要なことするわけ
ないでしょ！」

「……俺だつてしねーよ」

勢いよくまくしたててくるリインを横目でねめつける。

「つーかその場合だったら、俺たちが死ねば解決する話
だろ。それなのにその簡単な解決方法を指輪が止めるん
だ。だからこっちの可能性はいったん保留にしてい」
「それじゃ聞かせてくれるかい、クロウ。残りの可能性
っていうのは？」

「……正直、あまり考えたくはないんですけど」
クロウとリインが国を滅ぼす原因にならないのなら。

考えられるのは——最悪の筋書きだ。

「俺たち以外の第三者が……あの災厄を起こすこと
です」

「なっ……!?」

リインは顔をこわばらせるが、トリスの方はすでにその可能性に思い当たっていたように肩をすくめるだけだった。

そんななかで、クロウは隣のリインに問いかけるのだ。
「リイン。ひとつ聞きたい。おまえも俺と同じで未来を変えたいんだよな？」

「そ、そんなの当然でしょ！ あんな最悪な結末、もう二度とごめんだわ！」

「百点満点の返答だよ。だったら……話は早い」

そこでクロウは真っすぐリインに右手を差し出して――。
「リイン。俺と手を組もう」

「は……い!？」

「へえ？」

リインが目を丸くして凍り付く。一方でトリスは片目をすがめて笑ってみせるのだ。

「どういう気の変わりようだい？ おまえさんはリインを殺したいほど憎んでいるはずだろう」

「否定はしません。でも決着がつけられない今、無駄にいがみ合うのは得策とは思えません。それならいつそ手を組んで、第三の敵に対処した方が賢いじゃないです

か」

「ふむ、理にかなった考え方だね」

「そ、そんなの認められるはずないじゃない！」

我に返ったようにリインが叫んだ。

クロウの手を振り払い、鋭くとがった双眸そうぼうで射抜く。

「あなたは私の世界を滅ぼした『クロウ』とは別人かもしれない。でも……だからって手を組むなんて死んでもごめんだわ！　いつ裏切られたものだからわからないんだから！」

「ああ、そうだろうな。そして、それは俺も同じだ」

「……何が言いたいわけ？」

「俺はおまえを信じるつもりはさらさらない。指輪が止

めようと、俺にとっておまえが殺すべき相手なことに変わりはない」

そして、それはリインも同じことだろう。

互いを信用する必要なんて、まったくない。そもそも無理な話なのだ。

「休戦とは言っても、べつに馴れ合うわけじゃない。互いを監視し、いざとなればあらゆる手を使ってでも抹殺する。そういう意味での……張りぼての同盟関係だと思ってくれていい」

「ふうん……裏切り前提ってわけね」

「そういうことだ。お互いこれなら気が楽だろ？」
おどけてみせるクロウだが、純然たる本気だった。

今のリインはたしかに世界を滅ぼす気などないかもしれない。

だが……いつかその気が変わらないとも限らないのだ。その日が来たとき迅速じんそくに動けるように、クロウは彼女を見張る必要がある。

リインも同じことを考えているのだろう。じつとクロウを見据えて……ため息をこぼす。

「いいわよ、だっただらのんであげようじゃない」
彼女はやけくそとばかりに、ぎゅっとクロウの右手を握るのだ。

伝わるぬくもりは、肌が焼けると錯覚するほどに熱い。
未来で指輪を与えられた際、彼女と触れ合った記憶が

蘇りかける。

しかしそれに蓋ふたをして……クロウはにやりと笑うのだ。

「おまえはいつか俺が殺す。それを忘れるな」

「そっくりそのまま返してやるわよ、裏切り者！」

相反する少年少女がセカイを再構築する ヒロイックファンタジー大作



2019年2月15日頃
全国の書店さままで発売！

著：霜野おつかい／イラスト：イセ川ヤスタカ